当院における Lupus anticoagulant 陽性患者の臨床的特徴

○下村　大樹，前川　芳明，山本　慶和，松尾　収二（天理よろづ相談所病院）

Lupus anticoagulant（LA）は抗リン脂質抗体の一つで，血栓症や習慣性流産を高頻度に合併する後天性要因であるため，その検出は重要である．今回，LAが陽性である患者の臨床的特徴を知る目的で，基礎疾患，臨床症状および検査データとLAの関連性について調べた．

【対象】

1999年9月～2003年12月までに希釈ラッセル蛇毒時間法にてLAが測定された121検体を用いた．このうちLAが陽性で，カルテ検索が可能であった48例について基礎疾患，血栓症の有無，LAの推移などについて調べた．また，LAと関連するデータを調べるために，LA陽性群（68例）と陰性群（53例）に分け，検査データ（PT，APTT，Fbg，FDP，PLT，Hb，WBC，CRP）を比較した．

【結果】

LA陽性48例の年齢は8～83才（平均45.7才），男女比は約2：3であった．女性比率が高いのは産科症例を含むためで，20～30代では女性が約8割を占めた．LA検査のきっかけは，40才未満では膠原病，産科的症状，40才以降では血栓症，APTT延長の精査が多かった．基礎疾患は膠原病13例，悪性腫瘍6例，ITP3例の順であったが，様々な疾病が含まれていた．血栓症は14例にみられ，静脈系7，動脈系4，両方3であり，また胎盤の梗塞が原因と推察される習慣性流産は6例認めた．

LAが2回以上測定された16例のうち，陽性が持続したのは11例で膠原病（6例）と悪性腫瘍（3例）が多く，一方陰性化した5例は，感染症と考えられた症例が3例で，5例のいずれもCRPの低下に伴いLAが陰性化した．

LA陽性と陰性の2群間の比較において，LA陽性群は陰性群に比べ，APTT延長（P<0.001），Fbg高値（P<0.001），CRP高値（P=0.004），Hb低値（P<0.001）であった．陽性群においてAPTT延長は66%，CRP上昇は64%に認め，両者ともに認めたのは44%であった．

【まとめ】

LA陽性患者の基礎疾患，臨床症状は多彩であった．また，検査データはAPTTの延長と炎症性マーカーの上昇が特徴的所見であった．

連絡先　0743-63-5611